馬事往来

北海道和種と流鏑馬

齊藤朋子　古村圭子

Indigenous Hokkaido Horses and Yabusame Horseback Archery

Tomoko SAITO, Keiko FURUMURA

齊藤　朋子（さいとう　ともこ）
1999年帯広畜産大学入学，同大学大学院在学中に北海道和種馬と流鏑馬競技に出会う。2009年岩手大学大学院連合農学研究科生物生産科学専攻，博士後期課程終了。約6年半帯広市の農機具メーカーに勤務し，2015年11月より帯広畜産大学畜産生命科学研究部門特任助教。

1. 北海道和種馬の現状

北海道和種馬は，日本在来馬の中では最も登録頭数が多い馬種である。しかし1994年（2,928頭）から2014年（1,226頭）までの10年間で，頭数が半減している（図1）。

また，1994年には在来馬総頭数（3,466頭）に占める北海道和種馬（2,928頭）の割合が84.5%であったのに対し，2014年は在来馬総頭数1,817頭のうち北海道和種馬は1,226頭となり，その割合が67.5%と低下している。これは，宮古馬や木曽馬が10年間で頭数を増加させた（1994年に対する2014年の比率が，宮古馬で195%，木曽馬で156%）のに対し，北海道和種馬の頭数が大きく減少したためであると考えられる（ここまでに紹介した馬の頭数は，（公社）日本馬事協会の報告より引用）。

これまで北海道和種馬は，その性質や体格から，トレッキングなどの野外騎乗や，障がい者乗馬，ホースセラピーに適しているとされ，利用が進められてきた。これ以上の頭数の減少を食い止めるための方法として，北海道和種馬が活躍できる新たな場を用意する，ということが考えられる。近年，「和種馬」であることを生かし，日本の馬上武芸をスポーツに特化させた流鏑馬競技での利用が増えてきた。

本稿は，著者が流鏑馬競技に10年間参加し，流鏑馬競技に参加する北海道和種馬を生産している生産牧場で5年間一部調教を手がけてきた経験（図2）から，「北海道和種と流鏑馬」というテーマについてまとめた。

2. 流鏑馬競技馬に求められるもの

流鏑馬競技は「走る馬の上で弓矢を扱い，的を射る

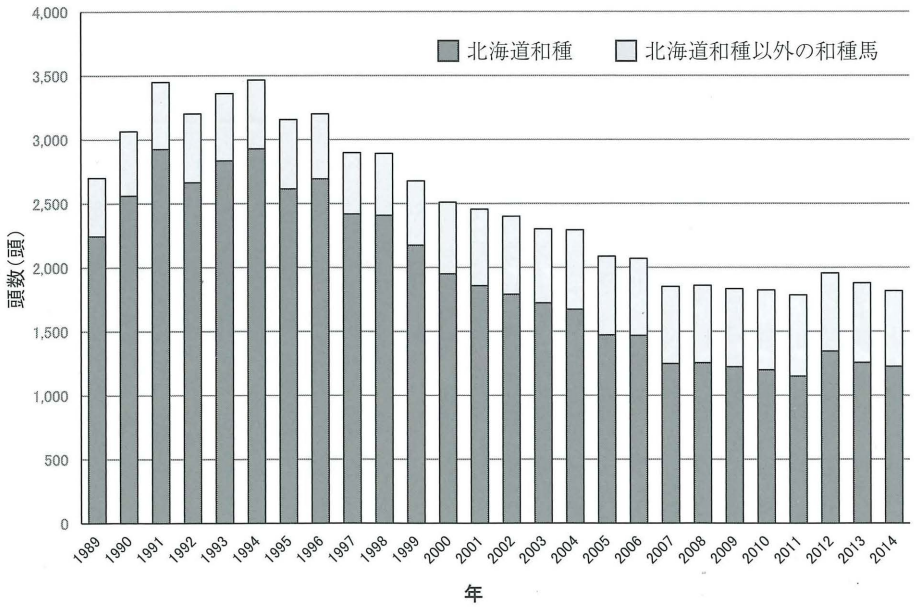


図1.　日本在来馬の飼育頭数の推移（（公社）日本馬事協会の報告より筆者作成）

図 2.　大会本番 1 週間前の馬の仕上げ調教中の筆者
2 の的に向かい射放す直前。馬は北海道和種 2 歳牝馬。競技区間を制限時間（参加予定の大会では 16 秒に設定されていた）以内に走行しなければいけない一般クラス参加予定のため，駈歩で走行中。的は最大円が直径 80 cm の 5 重円で，ベニヤ板とスタイロフォームを重ね，畳の上に設置した競技用である。大会の競技中は選手 1 人ごとに的に刺さった矢を取り除くが，写真は練習中のため前に走行した選手の矢が的に残っている。

精度を競う」競技であり，競技会の開催数は年間 10 試合ほどである。弓矢は両手で扱うため，スタート地点で発進後，最終の的もしくは競技時間計測地点を通過し，減速の合図を出すために手綱を持つまで手綱は持たない。しかも，左手には 2 m を超える弓（和弓の場合）を持っているため，競技中は馬を片手で制御しなければいけない。流鏑馬競技の歩様は駈歩～襲歩であり，小型の北海道和種馬とはいえかなりのスピードになる。たとえば馬が何かに驚くなどして暴走した場合，両手で手綱を持っている状況と比較してコントロールしにくい。また，イベントの行事の 1 つとして流鏑馬競技会が行われることも多い。その場合，公園など本来馬場ではない場所に臨時に柵を設置するなどして競技会場が設営されることもあり，さらに馬が走行する走路の近くに多くの観客がいるため，落馬や放馬などの事故が起きると深刻なものになりやすい。流鏑馬競技に参加する馬は，手綱や脚の扶助がなくても走路の中央を一定のスピードで走行し，観客などの外部からの干渉にも，動じることなく冷静でいられることを求められる。加えて，音声の扶助で発進，加速，減速，停止ができればさらに望ましい馬，となる。

また，乗りなれた自分の馬で流鏑馬競技会に参加できる選手はごく少数であり，選手は所属チーム内の貸与馬や，大会主催者が手配した貸与馬で競技に参加することが多い。貸与馬はどんな選手でも安心して競技に参加できる，たとえば「落ち着いている」「物怖じしない」「おとなしい」といった気質を持つことが求められている。

2015 年 10 月には，世界 13 カ国から選手を招待し，日光東照宮にて第 1 回ホースバックアーチェリー国際大会が行われた。日本国内で行われる流鏑馬競技の大会は，使用する弓具，競技参加馬の馬装，選手の服装は原則和式で行われることが大多数である。しかし，この国際大会のように，弓具や馬装や服装を原則「定めなし」とする，弓馬術の大会を開催する取り組みも始まっている。

「走る馬の上で弓矢を扱い，的を射る精度を競う」という競技は，様々なスタイルで今後増えていくことが予想できる。貸与馬のスピードや気性，選手と馬の相性が選手の成績を左右しかねないこともある。流鏑馬競技に参加する選手は，共に競技会に参加する競技馬を選ぶとき，できるだけ自分の技量に合う競技馬を選

びたいものである。「走る馬の上で弓矢を扱えるようになったばかりだから，スピードは遅くてもおとなしい馬を選びたい」という始めて大会に参加する初心者から，「迫力ある自分の技術を披露したいので，少々神経質でもスピードの出る馬を選びたい」という歴戦の上級者まで，選手が貸与馬に求める条件は様々である。これらの選手のニーズに北海道和種馬が応えることができれば，この弓馬術競技は北海道和種が活躍できる場となり得る。その要望に応えられる北海道和種馬を生産し，そして，流鏑馬競技を北海道和種馬が活躍する場として発展させることで，北海道和種馬の保存と活用を目指している「剣山どさんこ牧」という牧場がある。

剣山どさんこ牧で毎年20頭ほど生まれる北海道和種馬たちは，どの馬も2歳の6月に行われる流鏑馬競技大会に競技馬として参加することを目標に調教される。これまで牧場主をはじめとする多くの人が積み上げてきた経験から，剣山どさんこ牧では，流鏑馬競技に参加する馬の調教の方法と，その過程で流鏑馬競技に向いている馬と向いていない馬を見分けるポイントがいくつか見つけられている。

3. 流鏑馬競技のための調教

流鏑馬競技に参加するための調教の初期段階に「流鏑馬競技に特有の音」「流鏑馬競技特有の道具を持った乗り手」の2つへの馴致がある。この2つに対する馬の反応が，その馬が流鏑馬競技に向いているかどうかを判断するポイントとしてわかりやすい，ということが経験上知られている。

1)「流鏑馬競技に特有の音」への調教

「流鏑馬競技に特有の音」には，矢が的に当たる音と，走行中選手が保持している複数の矢がぶつかって立てる音の2種類がある。これら2種類の音への馴致は騎乗しないで行えるため，剣山どさんこ牧では流鏑馬の調教の第1段階として，さらに，驚きやすい，興奮しやすいといった気質を見分けるためにも行っている。

(1) 矢が的に当たる音への馴致

流鏑馬競技では，的に矢が当たらないと選手は点数を得られない。その的の素材によっては，矢が的中したときに大きな音がする。図2のような板の的と畳を使用して競技する場合と，奉納などで見られる板の的を割る場合（図3）では音が大きくなる。騎乗せずに馬を的の近くに連れて行き，実際に矢を射て的に当ててみて，馬の反応を確かめる。どの馬でも1回目は「驚く」「逃げる」といった反応を示す。その後の反応は馬によって異なり，早い馬では2～3回で反応しなくなるが，馬によっては何十回音を聞いても驚くこともある。大きく驚く反応がなくなれば馴致完了となる。

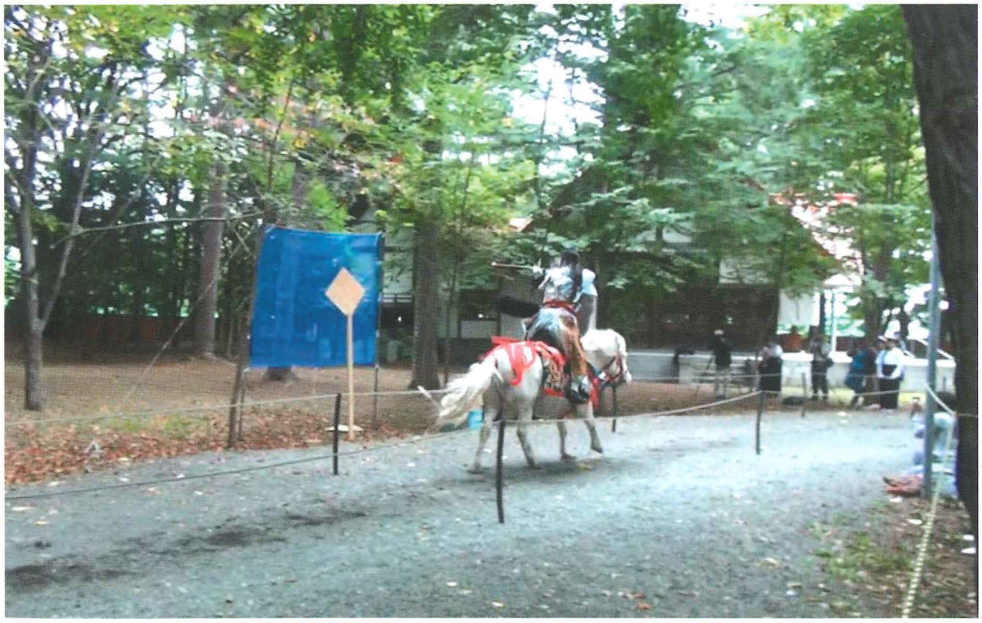


図3. 1辺約45 cmの板の的を使用する帯広神社奉納流鏑馬

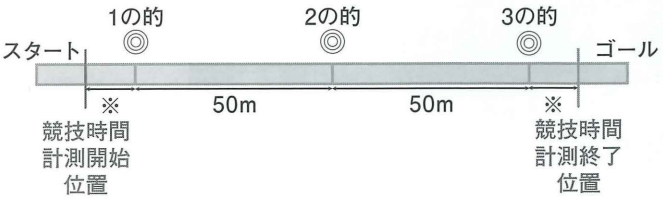
(2) 走行中選手が保持している複数の矢がぶつかって立てる音への馴致

競技では，複数の的の得点（もしくは，複数の的の当たり外れ）を合計して成績とすることが多い。このため，選手は何らかの方法で，複数の矢を保持して走行しなければならない。通常選手は矢を直接腰の帯やベルトに挟んで携行するか，矢を箙（えびら）などの容器に入れ，その容器を体に装備して携行する。特に選手がジュラルミンなど金属製の矢を使用して競技する場合，その複数の矢がぶつかりあって金属音をたてる。

騎乗せず馬の傍で複数（あれば10本ほど）の矢を実際に触れ合わせて音を立ててみて，馬の反応を確かめる。音を立てながら馬の全身を矢で触れていき，大きな反応がなくなれば馴致完了となる。

これらの「流鏑馬競技に特有の音への馴致」が不十分な状態で次の「流鏑馬競技特有の道具を持った乗り手への馴致」に進んでしまうと，騎乗した調教者の落馬のリスクが高くなるため，音への調教は十分行うべきである。また，それぞれの馬の反応を記録しておくと，馬の気質や注意すべきポイントが見えやすくなる。

さらに，たとえばチーム内の選手（特に自分にふさわしい競技馬を選ぶほどの経験がない初心者）を指導する立場にある人は，選手と馬の安全管理のためにも，人馬の組み合わせには十分な注意を払わなければいけない。この調教の段階で「音に驚いたときのリアクションが大きい馬」「音に無反応になるまでに時間がかかる馬」は，興奮しやすかったり物見しやすかったりするため初心者には向かない，といった判断材料にすることもできる。この第1段階は人馬の安全のためにも非常に重要である。



※競技時間計測開始位置から1の的までの距離と、3の的から競技時間計測終了位置までの距離は大会によって異なるが、10mを標準としている。

図4. 剣山どさんこ牧に常設された鉄砲馬場（直線馬場）概略
剣山どさんこ牧の走路は砂利が厚く敷かれており，安全に配慮されている（図2はその走路での練習走行中の写真である）。

2)「流鏑馬競技特有の道具を持った乗り手」への馴致

流鏑馬特有の道具は「弓」と「矢」である。このどちらも，弓矢を乗り手が身に着けて騎乗することで馬を馴致する。

(1) 弓への馴致

弓を持って騎乗し，弓を大きく振り動かしても大きなリアクションがなくなれば馴致完了となる。さらに，「スタートやゴールの待機場で周囲の選手の弓が自分の馬に触れる」といった状況も起こりうる。騎乗した状態で弓が届く範囲はすべて弓で触れておき，弓が馬体のどこに触れても反応しないよう馴致しておくことも必要である。

(2) 矢への馴致

腰に複数の矢を携行して騎乗し，「腰から矢をとり，続いて弓に矢を番（つが）える」という一連の動きを繰り返すことで馴致する。特に，前段階の地上での馴致で矢同士がぶつかる音に対する反応が大きかった馬には，馬の上でも矢同士をぶつけて音を出してみるなど改めて確認を行う。

3) 鉄砲馬場での調教

剣山どさんこ牧には全長約170 m，的3つ（50 m間隔）を備えた鉄砲馬場（直線馬場）が常設されている（図4）。はじめは手綱を持って騎乗し，馬場に馬を慣らす。最終的には手綱を持たなくても，安定して駈歩で走行できることが目標である。剣山どさんこ牧では「走行開始前スタート地点で一旦静止し，選手の脚および音声の扶助で発進後，競技時間計測開始位置を駈歩で通過し，走路の中央を安定したスピードで走行し，競技時間計測終了位置を通過後に音声と手綱の扶助で減速し，ゴールで停止できる」ことで調教完了とする。

手綱を持たずに安定して走行できるようになった後，前述の弓矢への調教を鉄砲走路でも行う。次に述べる最終確認の段階に到達する前に，「競技大会本番と同様の方法で矢を携行して（矢は携行するのみ）弓を持った乗り手を乗せて，鉄砲馬場を駈歩で安定した一定のスピードで走行できる」ところまで調教しておくことが望ましい。

4)「引き馬で静止した状態で，実際に乗り手が馬上から的に向かって矢を射る」調教

ここまでの調教を終えると，馴致完了の最終確認を

することになる。剣山どさんこ牧では，この段階に到達する前に調教者や周囲が危険であると判断した場合，「流鏑馬競技には向いていないと判断され，危険なため流鏑馬競技向けの調教は一旦中止」とすることがある。そのため，この確認段階に馬が到達できた，ということは，調教者が「この馬は流鏑馬競技に向いていると判断した」とも言い換えられる。実際，近年この最終確認は流鏑馬競技の大会での経験が豊富な上級者が行うことが多いが，この最終確認に到達できた馬は，人を振り落とすほどの大きなリアクションをすることは少ないようである。ただし，馬が「自分の背中にいる乗り手の手元から矢が飛び，的に刺さって音を立てる」ことに驚いた場合，特に騎乗している乗り手だけでなく，馬を引いている人にとっても怪我などのリスクが高くなってしまうことは言うまでもない。音や道具への馴致が十分済んでいることを再確認してから行うべきである。特に，この段階に達するまでに時間がかかった馬は細心の注意を払う必要がある。

5）最終確認を通過した馬

最終確認を通過した馬は流鏑馬競技の大会に参加できることがほとんどである。この後は鉄砲馬場で，常歩の引き馬，常歩，速歩，駈歩の順でスピードを上げ，段階を踏んで実際の流鏑馬競技の状態に近づけていく。最終的に晴れて2歳の6月に競技会参加，となるのが理想であるが，毎年，参加できるのは5頭ほどである。他の馬は，トレッキングなど流鏑馬以外の目的用の乗馬や肉用馬として利用，販売されるか，牝馬の場合は繁殖用馬として剣山どさんこ牧で飼養されるか販売されることになる。

今後，少しずつでも流鏑馬競技に参加できる北海道和種馬を増やしていくことは，北海道和種馬の活躍の場を広げることにつながると信じている。これからも，「流鏑馬競技」「北海道和種馬」の発展に，微力ながら寄与していきたい。

謝辞　この原稿の執筆にあたり，2002年に日本で初めての流鏑馬競技会を開催し，現在に至るまで13回大会を継続して開催されている，剣山どさんこ牧の川原弘之氏に心から感謝申し上げます。川原氏には，流鏑馬競技馬の調教という貴重なチャンスをいただき，また，剣山どさんこ牧の走路の写真の利用などご快諾いただきました。